

障害を持った子どもたちの交流を深めるための電子メール利用

小学校知的障害児学級 国語・総合的な学習の時間

茅野市立玉川小学校

瀧澤 康弘

<http://www.anic.jp/tama-es/index.htm>

キーワード 知的障害児学級，総合的な学習，国語，電子メール，電子掲示板

1 はじめに

同じ学区にある茅野市立東部中学校（以下東部中）の知的障害児学級「若草学級」（以下若草学級）とは、例年、秋の焼き芋交流など、年に2回ほどの交流を行ってきた。若草学級の子どもたちは、全員本校の卒業生であり、6年生のYくんとはとても仲良しであった。そこで、この関係をさらに深めるとともに、本校知的障害児学級「玉川学級」（以下玉川学級）に在籍する、4年生・2年生・1年生の友だちへと関係を広めることで、将来、同じ地域に住む仲間として、助け合える関係が生まれるきっかけになるのではないかと考えた。

しかし、例年のように年2回の活動だけでは友だちとの結びつきを深めていくのは難しいと思われるので、より継続的な活動を位置づける必要がある。そこで、今年交流会の回数を3回とし、さらに、電子メールを用いることで、お互いの意識が途切れることなく、交流を継続させることができるのではないかと考えた。

この交流とは別に長野県の南部に位置する飯田市の山本小学校から、知的障害児学級「花の木学級」（以下花の木学級）の子どもさんとの交流を呼びかけられた。まったく知らない子どもたちの関わり合いに、コンピュータは有効に利用できるかを、子どもたちの姿から検証してみたい。

2 指導目標

- ・子どもたちが電子メールに興味をもち、その送受信ができる。
- ・文字や写真を用いたメールを作成することができる。
- ・交流相手のことを知り、相手のことを考えながら電子メールを書いたり活動の計画を立てたりすることができる。
- ・交流会への期待をもち、交流相手と一緒に楽しく過ごすことができる。

3 利用場面

交流会の打ち合わせや身近でおきた出来事の情報交換を行う場面で、電子メールや電子掲示板（メーリングリスト）を利用してきた。

4 利用環境

4.1 文字の入力

6年生のYくん、4年生のNくん、2年生のMくんは、昨年度よりコンピュータに触れてきた。主にワープロソフトを利用し、文字の入力はキーボードによるカナ入力やジャストシステム社の「ATOK スマイル」を利用し、マウスでの文字入力を行ってきた。

1年生のYさんは、コンピュータに触れるのがはじめてであったので、助成金でタッチパネルのモニターを購入し、気軽にコンピュータに触れられる環境を整えた。現在では、マウスでの入力もできるようになってきた。

4.2 子どもたちの利用ソフト

今回の実践では主にシャープシステムプロダクト社の「スタディノート」を利用した。グループウェアソフトであり、「ノート」「電子メール」「電子掲示板」「データベース」などの機能がある。今回は、この中で、「ノート」「電子メール」「電子掲示板」の機能を、その時々に応じて利用した。

「ノート」は表現に関わる部分をつかさどり、文章表現や描画表現、映像や音声を用いた活動表現を行うことができる。「電子メール」は特定の友だちとの情報交換。電子掲示板は大勢の友だちとの情報交換に適し、メーリングリスト的な機能を持つ。

5 稼働環境

プロジェクトがスタートした当初は、コンピュータ室に20台のコンピュータと、各校舎の2階にコンピュータが1台ずつ設置されていた。子どもたちが普段生活する教室にはコンピュータがなかったため、電子メールを打つためには、そのたびに別の校舎の2階にあるコンピュータ室に行かなければならなかった。日常的に電子メールを利用できる環境を整えたいと考え、今回の助成金を使って、教室内へコンピュータを導入した。また、HUBを購入し、2階廊下にあるパソコンから、15mほど離れた1階の教室まで、子どもたちと一緒に配線をした。

その後、8月に平成13年度地域イントラネット基盤整備事業により、コンピュータ室に40台のコンピュータが導入

E スクエア・プロジェクト成果発表会

され、各教室に情報コンセントが設置されることになり、快適にインターネットを利用する環境が整った。

6 学習の展開

6.1 電子メールの使いはじめ

(1) 「やった、ぼくのが届いてる。」

電子メールの活動の導入として、コンピュータ室で友だちにメールを書いてみた。電子メールの楽しさを知ってほしい。電子メールが送られたり、届いたりすることを実感してほしいという願いをもって活動した。コンピュータ室の中で、離ればなれに座り、メールを送りあった。送るとすぐに、相手の所に走りより、「届いてる。」と相手のコンピュータをのぞき込んでいた。

(2) 「校長先生から手紙がきてる。」

電子メールはさまざまな人に送ることができること。返事をもらうことの喜びを知ってほしいと願い、校長先生に協力をお願いした。校長先生に宛てに電子メールを書いてみたのだ。送るとすぐに、「校長先生の部屋に届いているか見に行きたいな。」という子どもたち。早速、校長室に行き、学校長をお願いして、コンピュータを見せてもらった。「本当だ、届いてる。」と満足そうな子どもたち。

その後、校長先生から返事が送られてくると、「校長先生から手紙がきてる。」と大喜び。すぐに「ぼくも返事書かね。」とコンピュータに向かっていった。

6.2 若草学級との交流

今年も若草学級と交流会を行うことになった。そこで、連絡を取り合う手段として、電子メールの利用を提案した。その際には、電子メールのメリットについても伝えた。

第1回目の交流会の後は、身近な情報を交換しあった。畑でとれた作物のこと。宿泊学習のこと。文化祭のこと。自分たちで作った口ウソクのことなど。

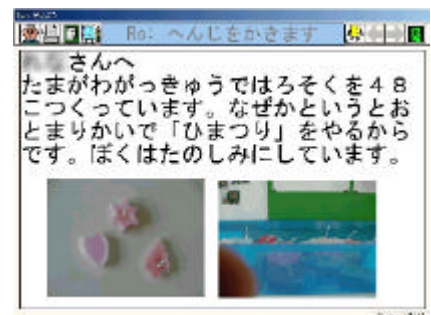
届いたメールは子どもたちが読みやすいように印刷した。子どもたちはメールが届くたびに、「ぼくが読みたい。」と取りあっていた。お兄さん、お姉さんからのメールを心待ちにしている様子が見られた。

6.3 花の木学級との交流

あるメーリングリストで山本小の情報教育担当の先生より、花の木学級との交流の呼びかけがあった。この学級には女の子が一人在籍していて、「友だちと会話をすることが思うようにできないが、お手紙を読むのが大好きである。」「他の学校のお友だちとメールで交流すれば、より多くの人とかかわることができ、社会性も育つのではないか。」ということが記されていた。スタディノートの導入校であり、新しい交流のスタイルが発見できるのではないかと考え、交流をお引き受けすることにした。

山本小は、本校から80kmほど離れた学校である。1度も会ったことのない子どもたちが、電子メールによる交流を続けられるかと心配したが、実際にはじめてみると、子どもたちは楽しみながら活動をしていた。

11月末には茅野市教育委員会のご厚意もあり、山本小まで車で行く手配をしていただき、念願の交流会を実現することができた。「Rさんかわいかったね。」「(山本小は)遠かったね。」と自分の肌で感じ取ったことを感想として話していた。



7 まとめ

(1) 知的障害を持った子どもたちにとって、電子メールは有効な情報伝達手段として使える。たとえば、自分の都合のよいときに用件を伝えたり、受けたりすることができるので時間に束縛されない。データが保存されているので、自分が理解できるペースで読み返すことができる。写真を取り入れられるので、より具体的に用件を伝えたり、受けたりすることができる。

(2) 字を書くことに時間のかかる子どもでも、文章表現の学習機会を与えることができる。

(3) 交流会と電子メールをともに行うことは、子どもたちの意識を持続する上で有効である。

(4) 写真で楽しいできごとを振り返ると、子どもたちの文章量は飛躍的に伸び「書きたい」「伝えたい」という意欲へとつながっていった。

(5) 相手を意識することで人を思いやり自分のこだわりを押しえたりする気持ちが芽生えてきた。

(6) 電子メールを振り返ることは、子どもたちの育ちや変化を振り返る窓口になる。

今後の課題としては、将来的に子どもたちがコミュニケーションをとる手段の一つとして、電子メールの活用が考えられるが、学校用のソフトから、市販されているソフトへどのようにシフトしていくのがよいか。障害をもった子どもたちのための「情報モラル」をどのように位置づけていったらよいか。問題に巻き込まれたときの対処法など伝えていく必要があるように思う。